鷺のこゑ集

へ 5
6526

三月翁祥忌に付はせを
拙者も発句拝附 乃夫之御句
御待下さる事御願申上候

未 十二月　　是三

初みのや拝さる〻の手山のかけ
見し山よの手をとらへて句(?)菜
咲出る花の書も(?)し 松梢の子
雨なる声(?)こ吉野のゆめ 静の影
山笑ふや(?)よ中なる花の下の鶴
うらむ(?)すや 拝の声まうし門(?)
大らかに舞ふ 梅(?)月夜哉
つい(?)と見る花 おもて 柳条

東雅

むらさきの色を見る雪にまかし畑
まるい月と(?)の雨(?)の声もかな
花に雪をたち(?)ゆへ いろ 鶴夜
まづ近よ松の(?)の下 柳条

文音

西京双林寺門前
芭蕉堂良大

大坂今橋町二丁目
五木菴潮水

東京深川中佐賀町
小築菴春湖

仝南茅場町裏通
中村茂左衛門
是三

民陽 雲林叢文庫

凡そ此道乃奥ハ趣を得てこそ
よみ出す言語をも新奇共見えし
今是を口中に味ふや 文もしや
暮く言子 取右ニ付んする色
の上有耳の味を好み入口語
ハ体配 是非をこころる人多し
吟ふ句も通ハ体を味ふとし(て)

松民蔵書

へ5
6526

010186021580

花乱の時そのまち見と時集
よしあ修しあつらく俗の一言
さわそん加衍あるく此學術を
志るし其高陽の八葉不下
まきしかその志風

辛未初冬　柳尾書

春之部

歳旦

初代は星去消しゝ稲さ面　士前

志銭し笑ふ顔陽の初の了良　兆左

蓬莱や住ある家に丞とまろ　拾山

元日ゆ初ゆく月松は暢る禮者かな　素渓

出逢して互に目出度の礼老哉　梅年

ちけやまだ一荷は魚も初茄子　蛾道

若菜や入ものゝ来る向ふ　龍湖

早春

日はしちよ夕飯まへや松の内　杜水

小松曳や本のくみ銭まとめ　松濤

八百善の彫子きゝたし薺の秋　金石

喰慕しき猿丸笑ふ寺朧月に　一鼎

拍子とる家ものや朧月よ嶋の声　芽谷

梅柳

来る人は掃かせて貸や梅の宿　太笔

梅は花見て来し記や十寸子　績雲

曾まての影に折艶零さね堅梅に　香芸

ともしてまはしらね梅や岨傳ひ　閑茶

見え弟子杖さゝげ句や軽の月と梅　竹良

梅は花ある風やあつさはまさ吹く　小雲

門前に遊ぶ日ぐらしの柳来　世海

涼し風をあらそふ庭の柳哉　其悠

朝起しおもしろさや堤の柳　九成

賎てふ人もむすひし柳かな　此一

見あきぬの錦となれ梅柳　南齢

鶯　兼題　東都月

うくひすや雲雀まさりて坂の家　等裁

鶯やおとろく芳たる梅の枝　木圭

鶯や鶯鳴や竹の節々　琴丸

静さよ鶯の数をかそへ待　介居

大きなや居なから聞きて鳴く家　三楓

春雨のふるまくや中に雀　木潤

笠開けて見る枝越しに春の月　禾雄

舟越えて路くまなく道や月　連水

見るものとなる山にも低し春の月　梅休

遊びしに雲先あり春の月　宇尺

指折の霞をさしつ春の月　沙山

蛙塚田舎し

枝折戸や暮く垣見て蛙の声　者我

うしろへも風の音まく梅や静小蛙　其残

帰せとはいかき人に庭に花蛙　雲濤

蛙聞みなすてとかり旅の家　呑海

出揃して田植和らける田螺哉　冬秀

石橋をこえしてけり如田舎し乱　雪香

まつの間さへ居りて雨の蟇　如白

雑吟

庖丁書見と[illegible]の鮓皿　琴堂

滝むし[illegible]や[illegible]の二つ折　草國

鶯[illegible]して[illegible]の[illegible]橋の妻　華岳

涼しさ[illegible]の色[illegible]露[illegible]　尋香

[illegible]月のさしくる窓の夜　壮山

鮎釣や川の筋ゆけその山　桐林

[illegible]日永哉　渓節

綿子咲や唐筆に吾妻風の吹　尭年

あの額よりうつしきの如く梅木に　柿谷

小袖の表酒の何ゆゑ白や稽古初　乙也

先もせり舟中

弱竹の嵐に吹れて朝の春　芝椿

海棠や鏡くもりし気ゆるみへ　松圃

蒲公英や咲やくしく字に石の影　参眠

姫舟　年始餅

磯畑や波のきはまでふやも　竹二

此畑の裏妹の肴や子供餘　柏葉

菜の花や限もとりて七里のあり　未貢

是迄しまるかねるまや菜の餘　嵐牛

花

旅人の雲路おりして初さくら　蝸堂

きかふまで咲まて居るゝ初桜　月彦

古川花や拾ふころの帽をとる　果推

口すくみ散てあり初さくら　田公

鶯の音す夜明のうまし櫻哉　静里

あけぼの景櫻色しむの山　一樹

ちらり散る花ちらはや花の雨　思樂

水とのゆかりや花の流来て　習儀

足跡もりあのあんすえやるの花　清節

夏之部

更衣すまし

けふの身も起くみつくしまつ袷　剃水

雲さへも新茶ありて青簾　青宜

蚊遣ははね新しや青簾　守考

宮もしかれ

公達の白きあしは晴て初しかれ　菅丸

去人の年の耳をそのわれて郭公　曲阜

松も見き花咲て残りし花の俤　永様

雨ふる花もしつかさや宮の朝ぼらけ　水音

故里の花に花ありとすてぬ世に　圓知

末ぬれてつく庭の花みちる牡鶴　江春

一輝の風なつかしや照ゆく葉毛　洋々

牡丹　蕊ちる哉

やゝあれく枕の出る牡丹哉　春齊

見る我のにほひさしし白牡丹　其隣

まくらもの又見し夜日も牡丹かな　三奏

水際出る葉も花咲や蕊ふる花　素山

花も見送る河あけての風のゆきつかる　言之

若葉すの二月ふしの寸蕊ちる哉　桃仙

花に葉の茂る雨には其の名牡丹　文昇

従猪　あき哉

従猪我夢や梢の雨流連　草居

さしの花や見る夜照る月の影　帰牛

螢火やまよひしあと人の群　潮水

さみたれの雲てらしけり螢かな　鳳兮

若葉　聞雲舎撰

若葉さし楼閣に宇治しるの里　雀安

舟山をいでしあとや若葉の府　文種

踏青の二階より見る若葉哉　篤志

白けしや牡丹ちるまで咲のこる　雪松

萬くの波の引きはなしけり　素屋

白けしの花落つきぬ夕日和　塘雨

松風の音にまかせてけし畑　桐齋

植もの　草類

葉さくらや行燈おきかす洲崎　喜水

まつりの郷は深きの音や木下闇　閑美

山吹を下葉にしたく茂りかな　愛海

咲として咲日もある樹哉　節堂

一八やあまた咲こそともある　杜鳴

兀山やあらし向ふ百合の花　古麥

雲とつれ中に照らし栗の花　蘆水

鶯は音入や篠を暗くなる　歸山

生ぬくゝなりや川音の枝蛙　卓志

山稜の雫の露を喰せし蝸牛　太年

梅雨　故郷

五月雨の名しる菜や山は夕くる　雅六

さしつけ跡ある宿のゝ薫の葉　古心

世の中や坊主掏る盗の又郎川　素陽

藤の折の寄鉄しま照て放蚊の姿　茂精

屋根の縄まで濡れるとか

坊主鏡して殺宿で折て提紙引　蓮宇

夏山野

志行むその水郭と節や夏の山　芳舎

頬白は鷺の嫁し夏乃朶　幹雄

晩鐘のさん寺ある夏野来　西美

乙女子か花にあまる夏野哉　酔雨

雑吟

涼しく菁千葉の中の菖蒲かな　此木

植木屋も未たしらぬ宿の新茶哉　他山

早乙女の袖葉くもさね庵かな　野井

山陰は夕日深み新川の流れ　禾啓

戸極くゝる声そ冷しき清み乗　乙瓢

寄升や雨葉に雫晴るゝ花の内　稲處

六月雨のくらや旅は出　犂春

以ち僧ハ山路見より夏の月　兒川

夕立は晴しかゝるや外路松　素朗

積翠亭人録

涼しさや呉青芝の庭つゝり　梅裡

滝しさく瀬ゝ黒さや蓋挨　逸外

炎夏の一夜ん添やたゝむしろ　積翠

去提節や風ゝ日傘の向ニまる　三外

打水や門はたてきる竹箒　　釣月

見ぬ人の月やゆふべは竹より出　　虚心

本宗一寺の忌

おぼろし庭木町の節や水売　　華兄

蝶の行方うつまし豆の花　　杏仙

夕かけ鐘ちかく寝や蓮の花　　一齋

麻苅るや葉付て戻る男の帰　　雪符

流れくる花出でく水止まる川社　　弘美

秋之部

家ありしは畜の茄子や今朝の秋　　菊也

初秋やまだ太りかはる麻羽織　　露牛

七夕　童子

杉山へ来のれのぼりて一言秋の月　　收之

雷雨すぎし秋風や一ゝ小袖　　竹東

玉椀のおちく魚売る雑魚場かな　　甘茶

送り出す数せつなく楚や宿下り　　椿齢

秋暑きりくも

杉子や秋来てやせし石がら　可應

まゝに秋意係て鳴かぬあふさかな　友昇

蜻蛉や飛ぶ一ト筋の野や燈籠　方月

猿楽の舞臺のあとやきりくす　波文

植木の出来

ちる木秋ながら川ぞ果ある柳哉　有終

淒まじき秋よもよに散る木槿哉　子紹

雨ふれば萩の末葉に垣根の子　斧删

思ひ出しやしてゐる秋の芝ぐさ　榮枝

涼しさや風つたふきゝ紫苑かな　嵐松

秋風まで来ゝる声てれも作の垂　曲川

新川も獺祭れやまた秋の窓　良大

庵ゆかや松原ははゝの棲きもの　月朶

雜收

静さに二百十日暮て来る　一芳

さゝ川窓縫て　おもての浦の秋　石叟

猿投山

まのあたりかすれて見えぬ秋の山　錦水

無氣船中

さゝ波の底のうねりや秋の海の色　宇長

さびしさも雲風情のみや秋の暮　市猿

萬ことに垣根も幸ありや初あらし　雪貢

空ゆけど霧素明らし秋の色　流翠

山端やとん顔清き手前しも　巣欣

月

清雪や五耕てる見たる浜の松　二柳

さしのぼり前ゐる人のゆるや昇る月　舒堂

日を雲に浮まかりまかり秋名月狭縁　雪潮

浦船を枕にあてゝ雨の月　可轉

墨水舟行

月澄や橋表三つ入る十七夜　契史

とりべ寺雪のくまや月の暁　杜堂

二條

松風や月を二十日の宵離き　羽洲

嫁風　菊

山をまへしゆふ日みゆれ秋の風　有海

川沿ひの庵の雨はし秋乃風　義風

秋風や落る日脚照る波のしら　千畝

名残とも見へく聞し夢や雁の声　林甫

昼のしもたる静也雁の声　研月

猶さかし木葉のうちもちる楓の外　蕉露

是迄花あか出てくれ柿紅葉　重村

清水汲日を避つけらる照葉哉　美喜

帰農しくもみるを拾く紅涼哉　完鷗

冬之部

こからしやつもとちりつ出あふ木葉　漁藻

兎もかく用意もつ神なきの夜衣　梅枝

神無しや松の水まき業まてふさま　車雷

こからしや入江に並ふ舟の群　芳泉

時雨　小春

野のこゝ来すて里へ大ひらや小松時雨　為山

初時雨通りしあとや橋の音　碩水

古寺の栗ふり切る時雨かな　永年

夢さめし時雨る山の影きえ　士芳

桐の実を吹おろしたる夜ね時雨　旭齋

しくるゝや橋行く松の実　筌露

行先の雲かゝりけり小春哉　有節

人出もまさるや小春の長堤　尾正

千鳥　水仙

啼さえく渚のくゝ千鳥かな　木和

浪の音かすか聲きこえて鳴子哉　一試

吹まくる枕にとまる小鳥哉　朴隠

折り羽をたゝむ小鳥かな　移柳

十夜盤すちひきよ宿や水仙花　漸風

水仙やわら屋のきゝ里かな　野鶴

二葉より　大根

風冴ゑてさらの葉や神の尾根　蒋池

手みじかに明る夜を葉かな　董江

宇治は業のはしの大根哉　潮風

保美の里は杜国の宅趾あり

古川の葉大根畑や保美の里　半桂

生まるゝ

笹鳴やええ鶏くゝり十日頃　東枝

艪拍子のたけしや鴨の行さう　半窓

行々てさく折業あらしを冬の原　桂女

たしくとたてゝ浮拝や冬の数　宇山

十月や百をかへて一日萩かな　見外
茶の花のくもりかゝる茶株　文路
藪たつの頃くるゝ枯野かな　立意
星すゝみ夜寒の蝶や冬の西　素水
おとゝけの膳に指たく山家かな　亜物
鰒汁のむかひに居て来あきれけり　静處

霜　寒

初霜や落ちかゝる桐一葉　乙彦

霜の夜は葉を包むてかち　黙平
　終る花山
汲みて積よ鶏や去年の霜ながら　義琴
きしく〳〵と報恩居てゝ後の寒さかな　三水
温飩にも日さし業さし無想窓　正价

雪

初雪や日さしくらくと暮にけり　黙池
朱雀降らぬ雪の茶の名かな　菁我

雪の戸や開く迄出もせぬ　乙雄

晴きく炭おし曝るや冬の窓　綺石

冬の月吹き年ちさく寒冬の　菊雄

けふは又そも中冬の寒の入　似水

冬の梅

手わしたそのゝ一輪冬の梅　五渡

月まるをゐとおそき寺冬の梅　翠兄

煤掃

煤はきや埃はうとき月の庵　寸松

ともに掃煤の暮る日和哉　竹茁

煤掃や内へうけたる雪の山　文海

歳暮

降る雪を寒きも物と年の市　一厚

神の松の常くあつし大晦日　閑月

足音も出しおれく庵の追儺哉　是三

門松を営む中や旅寝る　春湖

あきの水のこゝろふかしね別霜　士前

まつい鶯みられし鳴旭　是三

急羨むかしの蔵子が深くて　素浪

宇し瑕崇むかの縁のけるも　お

ちし追て以さよし月のさしか滋　三

竿まえてゆるく煙草よしする　冷

凉しさし椰子まよひの約きよく　お

帝名数きくのはなさらての楽　三

女子の別れに教の新世界　虎

産室横て門前のうへかく　お

くるくるまくら相識も中なかろうよ　三

月阿らう古閣あり　虎

沖送の節をきえて浮ひあけ　お

浅くなり孫も紙幕る十露盤　三

待んちうて来るなる須る荷を方　虎

さこのり秋乗りて名し挑まて　お

襟をまうくそすまちかうて月のまく　三

岩まねくみの家浴る滴　虎

き淡の毛布ほとに茶煮る硯箱　お

庵従佐三の稽古しまり　三

秋よりの由津りの外つ第えかけ　虎

寒ゝ入よして子ん餅搗　お

宗門とよ髪をしろへふり捨よ　三

きけん悪しは枕さし出し　沾

けふ又地獄ものの作筆まで　お

うち捨て小松が下の[illegible]深く　三

ちるむ人[illegible]が僧と連ねやう　沾

月影はさへ[illegible]ぬ日毎にて　お

息杖は[illegible]買うて戻る秋　三

あしひきの[illegible]無心の人　沾

[illegible]せいなりて　お

くろ[illegible]犬を追ひ出し　三

[illegible]ちよんと[illegible]けて[illegible]　沾

[illegible]ては[illegible]近き家[illegible]　お

あやまちに[illegible]花の[illegible]の　三

松の[illegible]きせ　沾

埋火の底にほこるや来る雨　東枝

蒼きのりよ垣の子梅　是三

撥ちらし焼酎粕のつけふして　東沿

汲へてやすり墨附手のあと　枝

おもしろく鼻つりのけてそよれ月　三

はやつまくして飲る薬精　沿

揚卿をふりて藤花風のたび　枝

気の族代る乳母ゟはまれん　三

くらきりよさし出みの黒し射　沿

ちよれんと別れてをや十日程　枝

夕涼よ誘ふ結廉の花もなくて　三

何やの嘉来り田をあわれ宇佐会　沿

思うもちよかつ見よと種る墓の様顔　枝

我命終まりてもすぐ出して鉄　三

あかるい事ハしておく嫁かつき　沾
ちと石敷のひろい庭まて　枝
五服をこひよりたて冬の月　三
まきはきの下に牛をかりちま　沾
吹荒をきらい燈ありふこのま　枝
まうへ遣りの荷は不格好　沾
居宿の身にて鳥も家上けて出　三
娘娵ひは聰慧ま来ぬ　枝

急なく文子依頼書ちんと家伝殊　沾
此川表の河岸に舟をまませて　三
降出しうすまつの手かうちに積る雪　枝
泥亀こひの歎の暗さよ　沾
持粉の周ミぬるしは亭の破り　三
傳閑は猿も日このきりのある　枝
手数晴らく亭の月表拵しま　沾
早下りしす坐した中波のときさ　三

はしりまく安積沼のわちこのひ　抜

盆の事まてかまふ世深　浩

そむきの足袋つとめてかしあまり　三

よるへあけるかし紙の音　抜

まゝよ咲花都は利家その　浩

霧まくのしまく山路落葉　三

星てみる蘆言かくしてみえ来　梅狸

一さしよみのゝ頬　樵代　来浩

あり聲からつけるとりや驚めまて　是三

渕らし徳をはらけさまに　禮

縮屋の花のまゝ蔭に初月に　浩

まつもおきこのねる扇ちらく　三

情ある名をいふくの出来ち　紀
きらさ一まいつけし料理椀　沾
見たけの伊ひき嫁の来る躰き　三
ひとへまはたちなへはそく　紀
野はけ筆も無く酒うとふく雲　沾
知きしみ子ありあり末気の夢　三
様穂のなしまて月の酒也て　紀
私う三の身けの何も糖きれ　沾

六月薬銭孫て律をさま涼きの　三
あるてさおもしね晴村の道　紀
残した眼く話り笠のおかで雲　沾
何やまかとおまて煮かへ　三
ふく葉咲くあねまりして挙　沾
両千と代のこのかる家数　紀
さ以掛お飯りいちんあ絶しま　三
湯分を新所の浴舟りあり　沾

菖蒲ふくまつりに新垂掃きし　紀

うらかへす帷子の丈　之

懐ろに思ひ残しておきし　浩

鶴子の宮くむすぶる　紀

万葉の人あはれハ鳥のはしりて　之

日の出をまてる月の松　浩

きり岩窟風穂のまおゝ早子　紀

ふ桶よせ　之

塚下のゆかし逸人ハ古や田舎　浩

時に同行と中倉の後　紀

記とりてこゝ法会のあまた纐歩　之

幡とゝる絵のゆかし　浩

井戸水の流れてしあはれハ　紀

別れてく雲のちりのおく　之

萌出し柳もさし染まり　是三
たしなみて　あまり醉ぬ菖か　等哉
朝舎よりく古郷の桂木川をせて　三
吹つけ句の心もあしやむ　哉
月ならぬ雷まて雲ごつて都の　三
年やゝ何かしそぞの声　哉

華やかに行ところあれ寂しく　三
猿まて勢まさる積まる　哉
おもかげ房女のうけ流し　三
長き唄詩唱ふ声のうき　哉
ふりかへる寝ざ故郷八ヶ百里　三
霧やや浣くたまる寳盃　哉
起くと梢ながめて消る月　三
錦もしる竹のうしろ　哉

あてよきる加具亀高廷ハ傳え給ひし
むかし我名は鄕の知己
花とけハ富貴は清のきしておける
あまき出羊の両るおしるね
紀つし三し性能登年多神て
給我あし長月ハ童出るま家る
字治る世の名高き事けも多しま
生ま人あれハ泡の名あらし

伸まて吉野ハ維年の麻呂のけ
紀し森の彰越し流れ小盥
お須磨の丈大宮司たけの吉し白
野分ハ嵩せ國と定家振るく
吉野しより結句まこと年まけハ
以まの吉野りま惠ハ服呂
石投の月尺る綿米氣さしかくり
野まうる紅跡りさへたりと言る

三 栽 三 、 栽 三

栽 三 栽 三 栽 三

名銭や奥は屏風を立まはし　載

まき、本陣の会客を移し　三

おとしみつ夕會勝ともへて移らむ　載

ゆ川最もたやし移長い牛買　三

雲雀の巣は蒼は来く熟く　載

ちしまみちての知る精背　三

履の銭河まとして月見哉　為山

砕かさぬれそうちかよ袖　是三

たろくと秋の葉茶も露けくて　野手

錦の衣きおいつも最あれ　山

焚きしき捨ひ集めて纔や　三

高まて以やもしおくよ抱れ　手

志川のさ綻ひハ苫る人さまれ　山
何よ洗けて業将おふしまう　三
夏さ納くり郭公る里業椿　手
込うく業浅しハ雪み傘　山
末のくま精と鶴の投出ておへ　三
風呂の加減を聞てやうる　手
初秋ほ秋對写も出れ月の秋　山
まうりすら紗を隠し礎ぶ降　三

須文の新絹たけきまれちまし　手
手入ふく翁ねもあ善精　山
花さけハ思ひまうけねあの末て　三
お川第へみちおて白奥　手
風光るたきらせ末の第先　山
お澄人佐の今ま紛まり　ま
以門津業勝ひ及おさ握ま貌ち　三
取退無業行くまれ幸ひ　山

ちよいとした事の出来て笑ふなり　乎

操に芝居見たるはたらく　之

相撲負てむかし気乱いふらて　山

指千の晴る夏しまふ年の　乎

世を立てゝ富よとしまる薪酒代　之

吹飛されし笠追ひてゆく　山

あちらこちら清水汲つゝ月の宿　乎

楓のちりし仲間居る事な　之

春川そりとこ村かのもるまなり　山

本まけり麻の糸しるし流　乎

春松葉貉（ムジナ）の穴に巣くふこけ　之

きらく昼の鵜る瀬の音　山

是程の花の座敷を見給ふなれ　乎

春秋利を出るちゃ取しなむ　之

富田藏書

明治17年